

完全保存版・今なら治る「がん」まだ治らない「がん」生存率公開

20年でがん治療はここまで進化した

「がんにかかったら死ぬ」なんて考えはもう古い。最新の生存率をもとに、がんの新常識をご紹介します。

■医者も驚く「生存率」の急上昇

「がんの生存率が改善しているということは、医師の間では『なんとなく』の共通認識でした。しかし、実際に数字を調べてみると、この20年ほどの間に劇的に生存率が上がっていることがわかったのです。驚くほどの改善でした。

かつて、がんは『不治の病』でしたが、そのイメージは大きく覆されつつあります」

日本の様々ながん情報を集約し、分析、検討している、国立がん研究センター。東京・築地にそびえるその一角で、同センター内の全国がん登録室長を務める松田智大氏はこう語った。

今年1月末、松田氏らが関わった研究が、全世界の医療関係者の注目を集めた。

それは、がんの「生存率」についての国際比較研究だ。

生存率とは、がんが判明してから5年後、もしくは10年後に、その患者が生存している割合のこと（以下、断りのない限り、「5年生存率」を「生存率」と呼ぶ）。

つまり、がんにかかった時に、どれだけ生き残ることができるのか、その目安となる数値だ。

日本人のうち、3割に近い人が何らかのがんで死ぬ。日本国民にとって、注目せざるを得ない数値でもある。

では、今回の研究、いったいどこが注目すべき点だったのか。松田氏が解説する。

「もともと今回の研究の目的は、他国と生存率の比較を行うというものでした。ただ、その中でひととき目を引いたのが、ここ十数年の生存率の変化です。

'00～'04年にがんと診断された人と、'10～'14年に診断された人の生存率の変化が明らかになったのですが、食道、胃では6～10%、結腸、直腸などでは5～10%というように、様々な部位で大幅な生存率の改善が認められたのです。

あまりに良くなっているので、過去の生存率を見ると、数字の低さにギョッとするほどです」

もはやがんは「治る病気」になった——そう言えるほどに日本のがん生存率の向上は著しい。しかし、この研究では、どれほど生存率が改善したか、細かい数字は紹介されていない。

そこで本誌は、国立がん研究センターから膨大なデータの提供を受け、この20年ほどの間に、各部位のがんの生存率がどれほど変化したか、必要な資料を整理したうえでまとめた。

ページ末の表をご覧ください。これは、各部位のがんについて、進行度別の生存率の変化を一覧できる表である。

たとえば、もっとも進行度の低いステージⅠの肝がんが判明したとしよう。20年前（'93～'96年の診断）であれば、生存率は30.3%にすぎなかった。

しかし、最新の診断（'06～'08年）での生存率は、45.8%にまで向上している。ステージⅠの食道がんが見つかった場合には、20年前なら55.2%だったのが、74.0%まで改善した。

すべての部位を総合しても、ステージⅠだと84.6%だった生存率が90.4%に、ステージⅡ～Ⅲだと43.2%が55.1%に、ステージⅣの場合でも、10.3%が13.6%に改善している。中程度の進行度であれば、10%以上の改善がある。

生存率がとりわけ高くなっている部位、ステージのがんは、表の背景の色を濃くしているのど、のがんで改善しているか、一目瞭然だ。

放射線治療の発展やMRIの登場、はてはAIによる診断の支援の進化などによって、かつて親や親族が亡くなった時代の「常識」はもはや古いものとなった。

それをもとに、がんを「不治の病」と捉え、「がんになったら終わり」などと最初から諦めていては、助かる命を捨ててしまうことになりかねない。

■肺がん特効薬の誕生

「今なら治るがん」と、「まだ治らないがん」を見極めることが重要だ。

前出の松田氏が言う。

「今回の研究で、日本は他国に比べて、多くのがんで生存率が高いことが明らかになりました。消化器系のがんの生存率は国際的に見ても、最も高いグループにいます。

ほかに、肺がんや肝がんでも、良好な予後を示している。日本のがん医療、検診、診断技術は、他国と比べても相当に進んでいると考えられます。

がんと告知されたからと言って悲観的になるのではなく、早く見つけて適切な治療を受ければ、治る可能性が飛躍的に高まるがんもあることを知り、冷静に判断をすることが大切です」

では、どのようながんで、生存率の改善が目立つのか見ていこう。

何とんでも改善が大きいのは肺がん。男性では、がんを原因として死亡する人のうち、肺がんが死ぬ人の割合がもっとも多い。かつては「かかれば死ぬ」と思われていた肺がんだが、ステージⅠ、ステージⅡ～Ⅲとともに10%以上生存率が改善している。

東大病院・放射線治療部門長の中川恵一氏が語る。

「肺がんの生存率が改善したのは、『イレッサ』など4種類ある『EGFR阻害薬』という薬剤のおかげ。これが効く人は、生存率が大きく伸びています。

肺がんは、『EGFR』という遺伝子の異常が原因となるタイプが約4分の1を占めますが、この薬は、このタイプの患者に有効に作用します。

これまでは余命3ヵ月と言われたような肺がんでも、この薬を使うことで10年以上生存するケースも出てきている。まだ使われ始めてから歴史は浅いので、今後5年ほどで、生存率はさらに上がると思います」

抗がん剤の恩恵を受けているのは、肺がんだけではない。乳がんも、ステージⅡ～Ⅲでの生存率が10%以上改善しているが、これも抗がん剤の質が良くなったことによるものだという。

食道がんも、生存率が大幅に上がった。ステージⅠ、ステージⅡ～Ⅲともに10%以上も数字が向上している。

慶應義塾大学病院・腫瘍センター特任教授の西原広史氏が言う。

「肝がんや胆管がん、食道がんは、手術技術が進歩していますが、とりわけ食道がんはその恩恵を受けています。

とくに、これまでは肺や胸骨などに囲まれた『縦隔』の部分の手術が難しかったのですが、いまは、胸部に開けた穴からカメラを通して手術をする胸腔鏡が使えるようになり、手術をしやすくなりました」

食道がんは、診断をしやすくなったという点も大きい。光仁会第一病院の院長で東京医科歯科大学名誉教授の杉原健一氏もこう語る。

「食道がんは、ステージⅠだと、がんの部分が平べったくなくて、盛り上がって見えないために診断が難しかった。しかし、いまの内視鏡だとそういったものでも、しっかりと見つけられるようになりました」

一方で、それほど生存率が改善していないがんもある。

生存率の低いがんの代表格である膵臓がん。「発見しにくく、手術が難しく、再発も多い」という三重苦から、20年前と比べてもそれほど生存率は上がっておらず、「まだ治らないがん」の筆頭と言えそう。前出の杉原氏が言う。

「膵臓がんはいまでも早期発見が難しい。これだけ診断機器が発達していても、CT スキャンを撮り、かなりの経験のある先生がそれを読まないことには、小さいうちに見つけれられません。膵臓がんは、膵臓の中に留まっている間はいいのですが、その壁を破って外に出るようなことになると、すぐに広がってしまうのです。

膵臓は横長ですが、薄っぺらい形状。がんは球状に大きくなるので、すぐに壁を破ってしまうのです。さらに、血管網やリンパ管網がたくさん通っているため、がんがほかの場所に広がりやすい。これを克服するのは相当に難しいことでしょう」

ただ、希望がないわけではない。前出の中川氏が語る。

「本当に早期で発見できた場合は望みがある。広島県尾道市では、がんの専門医と町の開業医が連携し、親族に膵臓がんの人がいるか、糖尿病に罹患しているかといった要因から膵臓がんの予備軍を見つけることで、早めの検診を促しています。

『尾道方式』と呼ばれ、同市の5年生存率は、全国平均の約3倍となった。こうした試みが奏功すれば、生存率は改善する可能性があります」

様々な部位で生存率の変化が見られるわけだが、では、仮に自分ががんだと診断されたとして、最新の生存率はどうなっているのか。性別や年齢といった属性をもとに、細かい生存率を知ることはできないのか。

本誌は、今年の2月に全国がんセンター協議会が発表したデータをもとに、最新の生存率をまとめた。次章では、それを参照しつつ、どんな技術で生存率が大きく変わったのかを引き続き見ていこう。

この20年で生存率はこんなに変わった

	ステージ	20年前の生存率	最新の生存率		ステージ	20年前の生存率	最新の生存率
全部位	I	84.6%	90.4%	肺	I	65.8%	80.6%
	Ⅱ～Ⅲ	43.2%	55.1%		Ⅱ～Ⅲ	16.0%	26.7%
	Ⅳ	10.3%	13.6%		Ⅳ	2.5%	4.9%
口腔・咽頭	I	75.0%	84.1%	乳房(女性)	I	96.6%	98.9%
	Ⅱ～Ⅲ	39.4%	49.2%		Ⅱ～Ⅲ	78.3%	88.4%
	Ⅳ	16.5%	12.6%		Ⅳ	25.3%	33.7%
食道	I	55.2%	74.0%	子宮	I	93.1%	94.1%
	Ⅱ～Ⅲ	19.1%	29.1%		Ⅱ～Ⅲ	54.1%	66.0%
	Ⅳ	3.7%	7.9%		Ⅳ	15.2%	18.8%
胃	I	94.4%	95.9%	子宮頸部	I	93.6%	93.4%
	Ⅱ～Ⅲ	40.2%	50.0%		Ⅱ～Ⅲ	52.8%	62.6%
	Ⅳ	3.1%	5.7%		Ⅳ	9.8%	17.8%
結腸	I	96.6%	97.4%	子宮体部	I	92.9%	94.7%
	Ⅱ～Ⅲ	64.8%	73.8%		Ⅱ～Ⅲ	63.4%	71.2%
	Ⅳ	8.2%	15.1%		Ⅳ	22.7%	20.1%
直腸	I	93.0%	95.1%	卵巣	I	89.6%	90.3%
	Ⅱ～Ⅲ	55.3%	69.4%		Ⅱ～Ⅲ	40.5%	53.2%
	Ⅳ	8.1%	17.2%		Ⅳ	15.4%	25.1%
肝肝内 胆管び	I	30.3%	45.8%	前立腺	I	96.5%	100.0%
	Ⅱ～Ⅲ	8.6%	13.7%		Ⅱ～Ⅲ	71.0%	97.7%
	Ⅳ	4.0%	3.5%		Ⅳ	35.2%	49.1%
胆胆管のう?	I	61.5%	56.9%	膀胱	I	91.4%	87.6%
	Ⅱ～Ⅲ	12.6%	23.4%		Ⅱ～Ⅲ	35.1%	37.7%
	Ⅳ	1.6%	1.9%		Ⅳ	7.6%	5.3%
膵臓	I	37.1%	38.6%	甲状腺	I	98.6%	99.9%
	Ⅱ～Ⅲ	4.5%	10.2%		Ⅱ～Ⅲ	94.0%	95.0%
	Ⅳ	1.1%	1.3%		Ⅳ	40.7%	42.2%

【表の見方】 **00.0%→00.0%** 生存率が10%以上改善したもの、**00.0%→00.0%** 生存率が5～9.9%改善したもの

表註：がん研究センターのデータでは、がんの進行度は「限局」「領域」「遠隔」で表されている。それぞれをステージⅠ、Ⅱ～Ⅲ、Ⅳに相当するものとして表を作成した

「週刊現代」2018年4月14日号より